

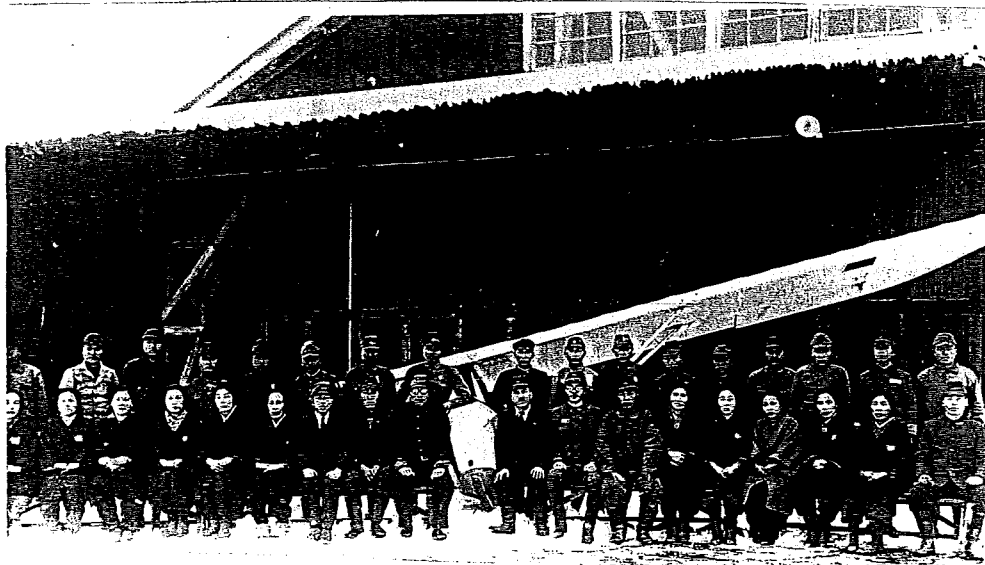
ま む ろ が わ く う し ゅ う は な し
真室川空襲の話

い っ か ろ く に ん う し な
一家6人いっぺんに失う

ひらおか まつざわ
平岡の松沢きみえさん

昭和20年8月10日

[小学校中高学年用]



2003年（平成15年）9月14日 真室川町立歴史民俗資料館

県全体の犠牲者は60～70人

米軍が広島に原爆を落としたのが昭和20年8月6日。長崎への投下は同9日。同じ9日にソ連（いまのロシア）軍が日本への攻撃に参加します。日本の体制は崩れる寸前でした。

同8月10日、米軍はとどめを刺そうと、日本全国の主な市や町に大規模な空からの襲撃を仕掛けました。山形県も例外ではなく、酒田市はじめ全県で攻撃を受けました。県内の死者は、当時の記録や文書が失われたため、正確な人数は分かりませんが、60～70人といわれています。

ねらわれた真室川の飛行場

それでは、8月10日の空襲で、どうして真室川がねらわれたのでしょうか。山形県の北のはずれ、全面積の90％近くが森林の、静かで平和な山の町です。ふつうに考えるなら、爆撃を受けるはずはありません。

空襲された理由は、当時、真室川の平岡に軍事用の飛行場があったからです。約300メートルの滑走路を備え、陸軍特攻隊が訓練に使っていました。いつも軍人や食事係、掃除係など100人ほどが集ま

っていました。

米軍の最大のねらいはこの飛行場です。町の中 心部には、このほか旧国鉄（いまのJR）の真室川駅の建物、奥羽本線のレールと鉄橋、飛行場近くの軍事工場などもあり、それらも攻撃を受けました。空襲は、午前の機関銃掃射と午後の爆弾投下の2回に分けて6時間近くも続けました。

松沢さん一家は巻き添え犠牲

真室川空襲で一番の悲劇は、巻き添えになった松沢きみえさん一家の犠牲でした。きみえさんの家は飛行場と隣り合わせでした。飛行場に対する攻撃の危険から逃れるため、一家は避難を始めます。

当時、きみえさんは20歳。両親、妹、弟6人、祖父の10人家族。一家ちりぢりになることなく、家族まとまって逃げました。結果として、かえって自立つことになり、機銃の集中攻撃を受けます。

この空襲できみえさんは、両親、妹3人、祖父の家族6人を一挙に失いました。

このときのことを、きみえさんは『戦争は2度といや』という強い気持ちを込めて次のように話しています（真室川町史 746 頁）。

「私^{わたくし}の家族^{かぞく}は10人^{にん}のうち6人^{にん}が一日^{いちにち}がかり^{ころ}で殺^{ころ}されました。

生き残^いったのは20歳^{のこ}の私^{はたち}を頭^{わたくし}に妹^{かしら}弟^{いもうとおとうと}4人^{にん}だけでした」

「あまりにも残酷^{ざんこく}です。涙^{なみだ}もかれ、ただ呆然^{ぼうぜん}とするだけの私^{わたくし}たちは、その夜^{よる}から親^{しん}せきに分散^{ぶんさん}して引き取^ひられました」

「その年^{とし}の秋^{あき}に私^{わたくし}の田^たんぼに仮^{かり}小屋^{こや}を建^たて再^{さい}出^{しゅつ}発^{ぱつ}しました」

「農繁^{のうはんき}期^{しん}には親^{しん}せきや近所^{きんじよ}の人^{ひと}たちに手^て伝^{つだ}ってもらい、子供^{こども}4人^{にん}寄^より添^そうようにして、ようやく^いこれまで^い生きてきました」

「生き残^いった4人^{にん}は現在^{げんざい}、それぞれ^{しよたい}所^{かま}帯^{げんき}を構^{かま}え、元^{げん}氣^きにやっ
ています。でも地獄^{じごく}のようなあの日^ひの出来^{でき}事^{ごと}は、生^{しょう}涯^{がいわす}忘^{わす}れることは
出来^{でき}ないでしょう」

(了)